

レッシングアンチ・ゲッツェ (一)

レッシング

アンチ・ゲッツェ (二)

井 汲 越 次 訳

アンチ・ゲッツェ

その三

Avolent quantum volent pleae levis fidei quocunque affiatu tentationum, eo purior massa frumenti
in horrea domini reponetur. Tertullii.

〔信仰のかるい穀穀なんぞ試練の突風に、どこなりとふつとんで行くがいい。のこりの穀物はそれだけ混りものなく
主人の納屋に納まるというものだ。 テルトウリアース〕

—五

すなわちこれ——『キ、リ、ス、ト、教、に、対、す、る、わ、た、し、の、直、接、間、接、の、攻、撃、』だ。

ところでだーゲ、ツ、ツ、エ氏は新約聖書の中にも少くとも一句は、天与にあらざる神来にあらざる——いや、単なる人間的な名教訓にとどまる、解
釈次第では除いてしまっても差支えない言葉があると考えておられる。それは——人をさばくな、そうすれば自分もさばかれることはい、三
という言葉だ。

なるほどねえ！そう云えば、氏自身をさばいておられない。ただ聖霊のお告げの審きをおおむ返し、されているだけのことなのです。パーゼド、テッラー、ゼームラー、バルトの諸君や、アルゲマイネ・ビブリオテークの執筆^四者や小生に對してこの審きの言葉を告げられることを名譽とし、娛しみるとされているにすぎないのです。聖書にもちゃんとこうあるじゃありませんか！不信仰の者は罪に定めらるゝ！^六つまり——なんじの言を信ぜざる者、なんじと信仰を同じうせざる者は罪に定めらるゝ！

これでは、いくら懸命に断罪されようと、所詮は雷鳴の罪のない反響にすぎず、いっそのこと御自身救われることを望んだがいよいよありませんか！、憚りながらわたしには氏自身この断罪によって救われることを望まれているようにしか思えないのです。慎み深いば、した女が子を産むことによって救われんことを望んだとて、あやしむに足らないじゃありませんか！この女の抛り処とした言葉もちゃんと聖書にあるのであります。それにしても、あんなしがない水商売に、よくもまあ、こうも御丁寧な、こうも手前勝手な、たくをならべて出たものじゃあませんか！これじゃまったく何やら様方の前じゃ口にするのも憚られる何やらいうお芝居に出て来るあのロワイヤールなにがし殿の名調子名演技そっくりそのままです。どうやらわたしの評判が——ふん、こんなシャボン玉みたいなものが何です！——わたしの往生済度の差し障りになりはしまいかと御心配なのでしょう。わたしの最後の身とりが不憫で不憫でならないでしょう。そして親切ごかしに、あれこれおべちやらやお上手をつかっていなさるんでしよう——ただ、あんまりいびりすぎて、このわたしをわが父の家から追い出しかねないいきおいなのです。

Ce Monsieur Loyal porte un air bien deloyal ! 「このロワイヤールおっさんたら、なかなかどうして一筋縄じゃいけんて！」^{一〇}

だけどころなことはみんな本論とは何の関りもないことだ。じゃ、早速本文の審議に入るとしまししょう！——よろしい、こっちはひとつも心に疚しいことはないんで、さような不屈き至極な曲者なんぞ、片っ端から撫ぎ倒し、当るを幸い面の皮をひん剥いてくれよう。——なあと、皮っぴらがこちらの顔にひっかかろうと、かまうものか！

まず第一は、わたしの間接の攻撃ということになるが——同書は主任牧師の解しられるところでは——「あの断片を印刷に付したのはわたしであり、また断片の著者の弁護にあたっているのもわたしだ」ということなのであります。

前の件は云ずわもがなの知れたこと。こればかりは否定しようもないことで、またできたとしても、いまさら否定したくもありません。後の

件も、わたしのやったことだというのは全然事実無根のことです——何としてもそうとってもらってはかないません。少くとも主任牧師さんが結びつけておられるような意味ではまっぴらです。

いかにもあの断片はわたしが印刷させたものであります。またこのことで世界中のゲ、ツ、エ、徒輩から地獄のどん底にたたきおとされようと、わたしはあれを印刷に付すでしょう。わたしが良心を以てやれると信じたその理由については、これまで縷々説明して来たところです。ところがゲ、ツ、エ、さんときたら、そんな理由が何だとばかり、一向承引されようとはなさらないのです。だが「よしわたしがあの断片を活字にしたとしても、同断片紙上で実際に槍玉にあげているのは、キリスト教の真理とか聖使徒たちとか、さらにはわが永遠の王の榮譽といったものではなく、むしろ現在わたしが勤めている奉公先きの王家なり、御当家歴代の顯官功臣の方々とか、さらにはまた御当家の現君たる王の榮譽とか清潔潔白ということになる」のだから、同じくこの理由からしてもこちらの云い分をお認めなさるよりしよがないじゃないかとわたしにやりこめられて、渋々承服されたまでのことではありませんか。

いやはや子供だましな！それにまた何と狡い、かつまた何と意地のわるい！——というのは、主任牧師さん、何よりもまず問題を双方等分にわけてみたらよくわかることなのです。あなたはほんのちょっぴり、片っ方の天秤皿に載っければいいのを、そいつをお忘れなすったままでののです。御存じの通り、平衡がとれていれば、ほんの僅かばかりの匙加減で忽ちどっちか一方に傾いてしまうものです。だからまず一方の皿だけなおせばいいのです。だからさしずめ当方のお上のお墨付をいただきなさいませ。

と申しますのは、おっしゃる通り、歴史論とも政治論ともつかぬこのような断片を印刷に付したかどによってわたしを窮地に陥れようとする位、わけないことなのは誰が眼にも明白なばかりでなく、多方面から当家の榮譽や特権のほとほと言祝する機会や材料を提供する以外に他意ないことだからなのです。だとすれば、わたくし輩にこの種の断片を印刷させてもかまわないのかとの御懸念はさほど御心配なさるまでもないのではないのでしょうか？それをどうしてまたあんなことをおっしゃるのです？あんな榮譽や特権なんぞ、まだそうはつきりきまったものではないからだとおっしゃるのですか？まだしっかり土台もかたまってないのに、これ以上掘りかえされてはまずいということなのですか？おお、主任牧師さん、もとより御厚情御高配のほどは御当家さまにおいても有難く、深く、深く感謝されているところです！——そのことなら、憚りながら、何かのお役に、お上のお墨付をいただいて差上げるに吞かではありません。

それとも、わたしの奉公先の主家の特権なら喜んで認めるが、わたしの信じている宗教の真理ということになると、そいつは認めるわけにはいかんとおっしゃるのでしょうか？この後者に対する一切の反論には、前者同様お答え下されるものと宛にはいけないでしょうか？この場合も新たな反駁はさらにまた新たな論議を呼び、より尖鋭な疑問はさらにまたより尖鋭な解決を生むものと期待してはいけないでしょうか？

「それやそうだと！」と、主任牧師さんは云われます。「それやそうだと！宗教というものがわれわれの渾身救世のために啓示された真理の真髓とみられているからには、これについて誠実にびしびし論議されればされるだけ、実際に得るところは多々益、便ずなのである。ただしこれは客観的宗教にかぎる！客観的宗教にかぎる！主観的宗教となると全然違うのだ！主観的宗教となると、前者がこうした論争によって多々益、便ずするのに反して、之によって益、失うばかりなのである！だからして——」

ところでこの主観的宗教とは何か？——「宗教に対する人間各人の気持の持ち方、かれらの信仰、かれらの安心なのであり、またわれわれ——かれらの教師たるものに対するかれらの信頼なのである。然るにこの教師たるや、今日わが神聖無比な宗教に対して、ドイツ語で書かれた言葉によって、一言一句毒されている始末なのである」

そうですかね？これはこれは！まことにややこしい区別だが、もしこれが笑止なことともされず、この規定とは正反対につかってよいものとなら、この学術用語を拝借させていただくとしよう。

というのは、宗教というものは、なんのかんのと論難攻撃されたところで、主観的には失いこそすれ、客観的には得るところ多々益、便ずということが事実だとすれば、およそこの種の論難攻撃を許容すべきや否やは、この得失の大小如何によって決定されねばならぬなんて、誰あつて云うものですか！実際この場合その得失が同質のものなら、差引勘定すればいいんです。得失はその余差によって決まるんだから！だが実際はその得るところのものが大事なのであって、失うところは云わば偶然の副次的なものにすぎないので。利得はあらゆる時代に及ぶものだが、損失は反駁に答えられないかぎり、その場かぎりのことになってしまうのです。利得は、光明確信をにぎりたがっている善男善女のすべてに早速役にたつ。だが損失を蒙るのはごく少数の者にすぎず、悟性という点から見ても、道義の点から見ても、問題とするには足らないのです。失われるのはただ *Galass levis fidei* 【信仰のかるい杖】ばかり。疑惑の突風にあつて、よく実った穂粒からふるいおとされ、ふっ飛

ばされてゆくキリスト教のかるい穀殻ばかりです。

そんな穀殻なんぞ、テルトウリアーヌスが云っている通り、どこなりとふっ飛ばされて行くがいいのです！ *Avolent quantum volent* ▽——
ところが今日わが教父たちときたらそうじゃない！キリスト教の穀殻の苞ひとつ失くすんじゃない！ましてや穀粒をゆさぶり払おうともしやしません。

テルトウリアーヌスが当時の異端*についてなかなか鋭く指摘していることは、今日の不信の徒や自由思想家どもの著作に実によくあてはまることなのであります。これらの著作とて、あの異端と何処か違っていよう！ただ本来の異端がかつてあれほど怖れられていた所以のものが、今ではすっかり腰くだけになってしまっているだけのことなのです。別に何ひとつ直接離間分裂を策すでもなく、何ひとつ派閥徒党を組んでるってこともないのです。往時の異端は、文書なんぞより直接口舌でもって説いてまわっていたものなので、手始めにまず自分たちの唱道する教理に早即政治的な重みの加わるような信奉者を獲得することからはじめたものなのです。ところが今日この不信の徒は、ちょっとした思いつきを印刷にまわすだけのことで、それ以上何の工作もせず、どうやらそんなことで味方をかきあつめているのだから、別にそう大した害にもならないでしょうが。

*テルトウリアーヌス『異端論』^{二二}

従ってこれら自由思想家の著作は比較的悪の小なるものなることは明かです。ところがこの悪のより小なるものの方が悪のより大なるものより却って始末が悪いっていうことになりはしまいか？誠実なものが世に頭われんには—— *ut fides, habendo tentationem, haberet ius probationem* ▽〔信仰には、誘惑とか試練がなくてはかなわぬように〕——より、大なる悪もなくんばあらずというのなら、この善を生み出す小々の悪ぐらい我慢しようじゃないかというのも、あながち無理からぬ話じゃないでしょうか？どうでしょう？

おお、この馬鹿野郎奴！こちらで一艘浅瀬に乗上げ、あちらで一艘荒磯に木ッ葉微塵になったからといって、この自然界から嵐を追っ払おうたって！——おお、この猫かぶりめ！本性はこちらにはちゃんとわかっているんだから！大丈夫、引受けたなんて、きいた口をきくもんだから、こんな難破船救助の世話までしなくちゃならないじゃないか！せっかくお宅のお庭の掃除でもして、御自分の身の安泰、安楽をおたのしみなさい。嵐の奴め！これ、この通り、お宅の別荘の屋根は吹っ飛ばすわ。植木はすっかり根こそぎになるし、貴重な温室もおかげですっかりめっちゃ

やくちゃんになっちゃったじゃないか！嵐の奴だとて、ふだんなら結構自然のために、何かと有難いこともしてくれたものだったが、これじゃまったく合なしじゃないか！お宅のお庭ぐらひは荒らさず、何とかお手柔かにしていただけなかつたものなのか？何故またお宅の屋根ぐらひ避けて行ってくれなかつたものなのか？あのお宅の境目についた途端に、おとなしく鳴りを静めて御通過ならぬものなのか？^二

テルトウリアーヌスは、当時の異端の徒に甚だ快かず、かれらの隆盛を甚だ奇怪なこととしていた連中のことを評して、*vanne et inconsiderate hoc ipso scandalizantur, quo tantum haereses valent*。〔異端の徒はこれ位のことならやれると定められていることをやっているまでだが、それが癪にさわるなんて、情けない、愚にもつかない蹟きの石〕だと云っているが、主任牧師さん、もし今日異端と云わば云うべき徒輩の紙上論で、ああ大騒ぎおっぱじめたをあなたのことを、テルトウリアーヌスが見たら何と云うでしょう？一匿名の断片なんかのことで——多分こんなふう云うことでしようて——

「近眼者流よ、——*nihil valebunt, si illa tantum valere, non mireris?*」もともとあれしきのことしかできないのだから、ああまでさわぎたてなかつたら、あの異端の徒に何ができよう？」あの断片がいま予想外の禍いをひき起しているとすれば、それはあなたがあんなに騒ぎたてたせいなのです。匿名氏は何も別に名前を記そうとしたのじゃありません。それならそれでちゃんと自ら名乗って出たでしょう。また何も別人をあつめようとしたことでもありません。それならそれでちゃんと自分の存命中にされたでしょう。要するに——あの断片を印刷に付した当人の方が、あれのことをわいわい喚きたてる御当人よりずっと罪は軽いつてことなのです。前者はただ多くの人が読めるようにしただけのことなのです。それを君は実際に多くの人に読ませた上に、更にまた読まざるを得ないようにしてしまったのです」と。

多分、主任牧師さんはこうした批難を、わたしなんぞよか、よその何処かの教父の口からきかされることでしょうか！

『アルトナーエル・ポストロイター』第三〇号掲載の紹介文に対する回答

一、わたくしがあのマーシヨの著書の書評までもゲツツエ氏一人の責任になすりつけようなんてことしたことがありますか？現にはつきりゲツツエ商会と云ったではございませんか？同じ社名をつかっているからには、フライヴイッリゲ・バイトレーゲの寄稿者たちの社中なことはまさか否定はされずまい。主任牧師さんはこの合名会社の外に時々特別自分だけの社名をつかっておいでたからといって、前者の責任まで負

うことはないとおっしゃるのでしょうか？それにしてもわたしを有罪と断ぜられる同じ原理が恰度この、マ、ー、シ、ョ、ー氏の著書にもあることは御存じなので、さしずめ Fr. Bel. 「フライヴィツリゲ・バイトレーゲ」紙上で、マ、ー、シ、ョ、ー氏とわたしを同列に取扱ったまですと云われるのなら諒としましょう。——二、だがアルゲマイネ・ビブリオテークに何かお気に召さぬことがもちあがると、その都度何故またニ、コ、ラ、ー、イ氏に、ゲ、ツ、ェさんに特に陳謝しなければならぬとおっしゃるのです？ニ、コ、ラ、ー、イ氏は何も別にA、B、「アルゲマイネ・バイトレーゲ」の主幹でもないます。ニ、コ、ラ、ー、イ氏とてA、B、に載った論文全部に予め目を通しておられるわけじゃございませんまい。多分、かれ自身何も別に同氏に反対なようなことは一言もお書きなさらなかったでしょう。ゲ、ツ、ェ氏がニ、コ、ラ、ー、イ氏にしていることを、わたしがゲ、ツ、ェ氏にして何処がわるいのです？——三、よしまたわたしが間違ってたとしても、こんな些細なことからして、わたしの他の主張も押して知るべしと読者に云わせようとなさるのですか？それか、ゲ、ツ、ェ氏とかE氏とかの思う壺にはまたつような結論を出そうって思えば出せないことはないでしょう！このE氏が何処の某だろうとままよ。これ以上詳細を明かにせよなどとは申しません。

アンチ・ゲッツェ

その四

Tente sin saber Latin,

Nunca es gran tonto,

Francis. de Roxas

〔ラテン語がわからぬ馬鹿者じゃとて

大馬鹿者じゃござらんで。

フランシスコ・デ・ローハス〕

—六

けれどもどっちか一方だけで、片一方の方はないという場合も大いにあり得ることだとしたら？——「キリスト教が主観的にはいささかも失

損を蒙らずに、客観的には自由思想家どもの攻撃からしてあらゆる利得を得ることができるとしたら？

それ、そうなれば益々結構でしょう。だがどんなふうにとどうやって？——偶々ここに、とても基礎ができてるとはいかないが、眩学臭紛々たる着想をひっさげて現われて来たものがあるのであります。余人なら或は馬鹿にするだけのことかも知れませんが、わたくしは、わたくしとしてとにかく一応検討してみるとしましょう。というのは、わたしなんかこの眩学的なところにかえってひきつけられるのです。

抑々論争なんてものは学者の言葉しか用われないものと相場がきままっているということなのであります。「ラテン語で書きたまえ、諸君！ラテン語で書きたまえ！——さあ、クラスの中、もっとラテン語のできるものがないのか！ラテン語のできるものが！」

——いいからもう止めて下さい、教頭先生——御真意のほどはよくわかってます。先生は、好きなラテン語で、何とかして一枚でも余計、推薦状を書いてやりたいんです。『ラテン語を勉強したまえ、若人よ、ラテン語を勉強したまえ！反宗教論という奴はみんなラテン語で書いてるんだ！いくらラテン語を書くがいやでも、ラテン語の文章は勉強しなくちゃ駄目だぜ』——そこで若い連中は一所懸命、頭から湯気をたて、ラテン語を勉強しているのです。

わたしは何もこの着想を単なる物笑いの種にしてやろうというのではない、よく検討しようと言ったまです。——それがどうやらうら、はらのことになってしまいはしないかと心配しているのです。——だがまたそうだったところで、あながちわたしのせいとばかりは云えないんじゃないかなるか。では、いよいよ真面目に本論に入るとしましょう。

さて——反宗教論を書く、とするものは、一般世人の憤懣を買わないために、ラテン語で書くより、仕方がないということになるようなんです。ところが、ポーランドとかハンガリーみたいに、一般世人でも比較的ラテン語がわかる国では——反宗教論はそれじゃギリシャ語で書いてもらえということになるでしょうか？——もちろん！——すると、これまたこれらの諸国にギリシャ語を普及させ、そこそ絶対的教育策じゃありませんか！それやそうでしょう。よその国で書かれたラテン語の反宗教論の書物は、これらの国々には入って来ないのは当たり前です。

ただどそうなるもまた木阿弥なので、何とかしてこんなことにならないように行かないものだろうか！——「せっかくの提案がポーランドやハンガリーで駄目だからって、なんです！現にドイツじゃ何といても一番役に立ってるじゃありませんか！——

ほんとか？役にたってるって？——実行もされなければ、正当でもなく、賢明でもキリスト教的でもない、こんな提案が果して役に立つか？

——このことについてこれからここで出来るだけ真面目に論議いたしたいのであります。

もっとも、わたしとてもこの提案が実行されるということをおそらく前提とせざるを得まい。なんならこれについて帝国法律がつくられるようなことがあっても然りと認めざるを得まい。というのは、帝国法律より力の弱い禁令なんか、あってもなきが如きものとなってしまふからです。事、宗教に関しローマとは違った論法で反宗教論を書いたからは、神聖ローマ帝国領内にあっては忽ち打首とまではならずと、ペンもインキも与えられず、パンと塩のみの無期懲役は覚悟せねばなるまい。法律がすでに神聖ローマ帝国の名において存するからには、実施されないなんてことはあり得べからざることはなかるうか？

それならそれでよろしい。では実施されるとしましょう。だが果してそれで正当なものなのか？——およそ法律として、かくも多数の無能の輩にはそくばくの権利を与えながら、有能の士には与えなんて法律が正当なものたり得るでしょうか？——しかもこうしたことが現に当地で行われることだということを誰知らぬ者があるう？それとも、ラテン語自身、宗教に疑惑をいだかせ、かつそれを表現する力を与えるものだろうか？そうした能力が万人に例外なくありと認めるのは、ラテン語自身に対する無知の然らしむるものではないか？抑々良心的な思慮分別ある人間というものは、ラテン語なしにはあり得ないのか？世にはラテン語のできる馬鹿、阿呆がいるではないか？何もわたしはデ・ローハスのラテン語ではじめて正直正銘の馬鹿が生れたという説を主張しようというものではありません。正直正銘の哲学を生んだのもラテン語ではありませんか。——さらにまたラテン語といってもどういったラテン語ができるのですか？さらに進んでラテン語が書けるようになるということなのか？それではラテン語が書けなかったベ、^三コンは宗教に疑惑をいだいていたとしても——ベ、^二コンだとしてこの疑惑を抑えなければならなかったものなのか？——するとラテン語の論集類を蒐集されてる教授連中は、ベ、^三コンにも許されてなかったようなことが尽く許されるということになるのだろうか？さりとてわたしはベ、^一コンのことをウ、^四アルテみたい、^四に、自国語よりも外国語の方がうまく表現できるなんてよっぽどの施毛曲りか、朴念仁の標本みたいに考えていた人とは思ってはいけません。だがベ、^一コン、本人はきつこう考えていたでしょう。おれはいくらラテン語を書きたくとも書けないんだから仕方がない。また書けたとしても、いやだねえと。——多くの御仁は自分たちの書いたラテン語がどんなものか御存知だったら、ラテン語を書くものも少しは減ったでしょう。もちろん、かれらとて書かざるを得なくて、書いたことなのでしょう。だがなかなかそうは行かないものです。

従って角を矯めて牛を殺すといった点から見ても、不当な悪法なんてものはどこまでも賢明ではないが、それは強^{あなが}ちその点ばかりではないのではなからうか？何しろ事が事だけに、一般世人の前では反対論もぶちにくく、一般世人の疑惑をうけるは必定だからではないでしょうか？それがラテン人ともなれば、検討して見た上で有用だということにならないと、なかなかどうして通訳にも紹介させるようなことはしなかったのではないのか？——そうでもしないと、結局角を矯めて牛を殺すようになるので、そいつもあまり賢明なことではないということになってのことではあるまいか？反宗教論的論議はラテン語で書くということになっているのは、禍の及ぶところが比較的少数者にかぎられていたからなのであります。だが実際に果して比較的少数者にかぎられていたのか？なるほどラテン語が或る階級の間に行われていない国では、いずれの国でもみな少数者だったでしょう。だが全ヨーロッパがそうなのか？これからさらに全世界ということになると、どうなる？なかなかそうは行かないのではなからうか？というのは、ヨーロッパ全体あわせたところで、ラテン語はできても、みんなからなんのかんのと疑惑の眼で見られたのではどうにも太刀うちできない人間の方が、各国ともラテン語のできないこの種頭の弱い人間よりも多いということになるのではあるまいか？魂とは、悪魔にとっての魂なのです。それとも、もし悪魔が魂に区別を設けるといふことになれやもう悪魔の勝でさ。例えば、ドイツ語の書物でなければ誘惑されようのないあの生粋のドイツ人ミッヘルの魂なんぞより、悪魔は大学出のフランス人なりイギリス人の魂の方をいただきます。脂味のないのより、上等の脂身のある焼肉をいただきます。アね。

だから彼の裁決、悪魔の裁決は、てっきりお利口でない法律のものでしょうよ。おまけに、そいつが非キリスト教的ならずときてるんですから。だがこのことからでも想像がつくように、正当でないときてはなおさらです。——もっとも、わたしのいう非キリスト教的とは、キリスト教究極の目的とは相反するところのものをいうのであります。さて、ゲッツェ、主任牧師さんにはまことに失礼ながら、わたしの解するかぎり、キリスト教究極の目的はわれわれの濟度救世ということではないのです。それはそれで何処からでもやってくるがいい。——われわれのいうキリスト教究極の目的とは、われわれが光明を得ることによってわれわれが濟度救世されることなのです。しかもこの光明を得るといふのはひとり濟度救世の条件たるに止らず、濟度救世の要件として必要欠くべからざることなので、われわれの濟度救世の一切は結局ここにあるのです。だからして少数者の憤りを買う位なら、いっそのこと多数者の光明を得るようなことは一切やるまいなんていうのは、まったくもってキリスト教の精神に反することなのです！未だかつてキリスト教徒だったことなきこれら少数者が、名目上のキリスト教徒として酔生夢死するよ

うなキリスト教徒なんか到底なりっこありません。この一部軽蔑すべきキリスト教徒は、より優秀な一部キリスト教徒が光明を求めて通り抜けんとする狭き孔の前へ押しやられるに相違ない。それともこの最も軽蔑すべき者こそ最も少数者なのではないか？それが多数なるが故にお目こぼしに与かる次第なのか？——本当のキリスト教には、それ相当多数の信者の群が集って然るべきなのに、未だかつてそのことがないというのは、従来説かれて来たキリスト教とは抑々いかなるキリスト教なのか？——キリスト教徒を名乗る者のうち二三の数がいかに憤慨しようとかれらのうち二三の者が自国語で書かれた自由思想家の著書にごかされて、自分たちはもうこれ以上普通の人間でいたくはないといくら宣言したところで、いまさらどうってことないんじゃないか？テ、ル、ト、ウ、リ、ア、ー、ヌ、ス、も云っているが、わたしも彼とともにこう訊ねたい。——

Nonne ab ipso Domino quidam discentium scandalizari diuertent ? 【御弟子のうちには、主に對して憤慨して背いて行ったものさえ一二いるではないか？】行動に出る前、殊に著作をはじめの前、行動なり著作によってこうしたら信仰うすき者を怒らせはしまいか、ああすれば信仰なき者を反撥させはしまいか、或はまた無花果の葉を盗もうとしている悪戯者に盗ってやるようなことになりはしまいか、前以てよく調べておく必要があるなどと云々する輩は——思い切って一切の行動や一切の著作は速刻やめてしまいがいいのです。わたしだとて、虫けらひとつ何もう好きのんで踏み殺したくはありません。だが虫けらひとつ踏み殺したくらいで、罪に数えられるくらいなら、いまさらじ、た、ば、た、しても仕方がない。身じろぎひとつせず、そのままそこから手足ひとつ動かすんじゃない。——生きるのを止めると、われとわが身に云ってきかすより外仕方がありません。形而上の運動というものはみなそれぞれ發展し破壊するもの、生と死とをもたらすものです。或る被造物には生をもたらしつつ他の被造物には死をもたらすものです。というより、死がなければ動もないということなのではないか？いや、むしろ死あり動ありということなのではないだろうか？

ところで宗教の敵対者はラテン語以外の言葉はつかうなどの要望もこうした性質のものなのであります。さらに好んでこれを法律化しようという要望また然りです！現に今日、事態はすでにそんなことになっているのです。ところがこれがやつと法律ということになると、真理の探求までもみんなそんなふうに見られるというのは、どうしたことか？——精神界の覇道は、幸いいまのとこ縛られてはいるが、これが獐猛極まる虎となつて距をむいて来たかどうか、その距から判断なさるがいい！

わたしがいまここで云わんとすることは、この点さきに主任牧師さんが七九、八〇頁で云われているところのことなのであります。だが或る

種の制限がついた或る種の条件下なら、宗教に対し批難攻撃をやるなら、どしどしや、つてよろしい、ということだと、その制限とか条件というものの狙いがどこにあるか嗅ぎつけられないでは、鼻風邪も少々ひどすぎるというものです。

「分別ある」——同箇所にはちゃんとこうあるのです——「分別あるしつかりした御仁なら、キリスト教はおろか聖書に対する控え、め、の批難攻撃ならどしどしや、つてよろしい」と。だがその分別あるしつかりした御仁とはいかなる人物をさすのかという判定は一体誰方がやるのです？ 真っ向から堂々とやれば、どれ位迫害を蒙るものか、よく計算できる頭のある男だけが分別ある男なのですか？ 職掌柄腰を下した安楽椅子にどっかり尻を落着けていたくて、他人にもどうぞゆっくりと懇望するような男だけがしつかりした男なのですか？ 問題の核心にふれないように手控える——返事もいい加減見当のつく程度しか進ませないように手控えるというのが控えめの批難攻撃なのですか？

そうなればきつと有難いに違いない。というのは、主任牧師さんは続けてこう云っていられる——「先生方をあまりいじめつけないようにするには、どうしてもそうする必要がある」からであります。——さあ、理由はそれだけなのか？ それでは、宗教論議は貴派の研習会にすぎず、狎れあいすぎないということなのです。主査の総長の相図をうけ、反対質問者の方で資格申請者には一言も答えず、主査御自身お腹がへってゆっくり丁寧懇切に答えていられないと見るや、忽ち討論終りということになる段取りなのか？ すると主査も反対質問者も早速いそいそと宴会にお出かけということなのでしょう？ そうでしょう、いや、違います——というのは、主任牧師さんもさらに附加えてこう云っておられるからです。「それにしても、もうそろそろこんな悠長な時代もいい加減願い下げにしてみたいものだ。こう悠長なことだったら、キリスト教も九世紀から十五世紀までのうちにすっかり滅びしまったらう」と、さすがに卓見だ！ だが主任牧師さんも御存知のように、あの野蠻時代ですらキリスト教に対する批難攻撃にはさすがの坊様方も答えきれないくらい猛烈なものだったのではありませんか？ これらの時代がキリスト教をあれほどまでに墮落させたのは、キリスト教に疑惑をいだくものが無皆だったからでなく、たれ一人これを世間に公表するものがなかったからなのであって、これらの時代が、主任牧師さんが現代もかくれあかしと云われているような時代だったかだとはお考えなりませか？

訳者注

その三

注一 *Avolent... reponetur* — テルトウリアヌス『異端論』(Tertullianus, *De praescriptione haereticorum* — 直訳すれば『異端排撃について』)だが、内容的には異端弁護論で、以下『異端論』と略す(第三章からの引用。レッシングはラテン教父のうちでも特にテルトウリアヌスに傾倒、就中同書は彼の全思想の云わばバック・ボーンをなすと云ってよく、彼の手になる独訳がある。なお本論集一号の本文四五頁第四号の注三参照。

注二 『キリスト教に対するわたしの直接間接の論難攻撃』——その二の冒頭にある通り、ゲッツェは一七七八年復活祭に『神聖無上の宗教及びその若干の教理、聖書に対する王室顧問レッシング氏にの直接間接の論難攻撃に対するさしあたっての反論』を著し、次いでパンフレット『レッシングの弱点』を書いてレッシング攻撃を開始した。本論集第四号『アンチ・ゲッツェ』その二の本文並びに訳者注二参照。

注三 人をさばく、な——新約ルカ伝、第六章三七節の言葉。

注四 バーゼドー、テッラー……の諸君——いずれもプロテスタント神学関係の進歩的な啓蒙思想家。バーゼドーについては本論集第三号の注九(七六頁)参照。——テッラー(W. A. Teller, 1734—1804)はベルリン啓蒙派の神学者。——ゼームラー(J. S. Semler, 1725—1811)はハレ大学の神学教授、その著『匿名氏の断片に対する回答』(*Beantwortung der Fragmente eines Ungenannten*, 1779)に附した筆者不明の一文は、折柄『ナータン』執筆中のレッシングの気を害したようだ。所謂歴史批判派神学に属し、宗教と神学とをはっきりわけ、信仰を神に対する直接信頼におく。レッシングの『ゼームラー駁論』あり。なおバルトについては本論集第四号その二の注一二(五五頁)参照。

注五 アルゲマイネ・ビブリオテーク——レッシングと親交あったベルリンの出版業ニコライ(Chr. Fr. Nicolai, 1733—1811)がヘルデル、メンデルスゾーン、ツェルテル等と語らって、一七六五年に出した評論紙『*Allgemeine Deutsche Bibliothek*』のこと(因みに同紙は一七九二年に終り、翌九三年からは『*Neue Allgemeine Deutsche Bibliothek*』と改名、発行せらる)。ゲッツェは一七七八年同紙の批難に対して反駁

文 ≪Pflichtmäßige Rettung seiner Unschuld gegen die schmähsüchtigen Angriffe der A. D. B.≫を発表す。

注六 不信仰の者は云々。——新約マルコ伝第十六章十六節の言葉。——次になんじとあるは、原文では彼であり、従ってここではゲッツェ氏をさすは云うまでもない。

注七 慎み深いはした女云々——新約テモテ第一の手紙、第二章十五節に「しかし、女が慎み深く、信仰と愛と清さを持ち続けるなら、子を産むことによって救われるであろう」とあるによる。

注八 ロワイヤールながし云々——モリエールの喜劇『タルチュフ』第五幕第四場に出て来る信心深い廷丁、なかなかの曲者で、家主のオルゴンを持家から追出そうとする。

注九 わが家の父から云々——新約ヨハネ伝第十四章、二節参照。

注一〇 Ce Monsieur Loyol……delayal——『タルチュフ』第五幕第四場、家主オルゴンの科白。

注一一 客観的……主観的云々——ゲッツェは宗教を客観的、主観的宗教の二つに分けて、「だからして」と続けてこう云っている。「宗教という言葉は、客観的乃至は主観的意味かいずれかに解せられる。第一の意味では、これはおよそ神に対して然るべき態度をとらんとする人間が認めて真理とせざるを得ない教義を総合したといったものをさし、第二の意味ではこれは、対神関係において人間がもち、かつ実証せざるを得ないといったような気持であり、態度である。当然のことながら、編輯氏が文字により聖書によって理解し得るのは、神学者たちが聖書の「内的形式」と呼んでいるところのもの以外の何ものもない。即ち、聖書を通じ、聖書の究極目的に応じて、人間にもたらさるべき言葉であらわされた意味内容と之によって生れた思想と観念以外の何ものでもない」云々と。

注一二 『異端論』——詳しくは前掲テルトゥリアーヌスの『異端論』第一章からの引用。之に対するレッシング注釈を彼の独訳から摘出すれば、「テルトゥリアーヌスが本章及び次の諸章で異端について云っていることは、今日その普及および影響に驚いてる理神論や自然宗教の著作にすっかりそのままあてはまる。というのは、自然宗教とても、信仰には誘惑や試練がなくてはかなわぬように預言されて来、かつ定められている徒党の中に入っているからである」

注一三 この馬鹿野郎奴……御通過ならないものなのか？——この一節はフランス革命前夜におけるドイツの封建貴族とこれと密接に結びつい

レッシングアンチ・ゲッツェ (二)

た僧職者並びに宗教関係者の危機感にみちた恐怖状態を示唆したものと考えらる。

注一四 vane……valent——テルトゥリアヌス『異端論』第一章よりの引用。本論集第一号四九頁参照。

注一五 nihil……mireris——テルトゥリアヌス前掲書第二章よりの引用。

注一六 アルトナーエル・ポストロイテル——ハンブルグのゲツェ派の有力法律家ウィッテンベルク (Albrecht Wittenberg, 1728—1807) が出していた『Altonaer Reichspostreute』の略称。同紙の一七七八年四月十六日号に、Eという匿名で、「王室顧問レッシング氏の報告に対し真相を明かにするため」(一)ゲツェだけが福音派の機関紙の『フライヴィッリゲ・バイトレーゲ』、「いわゆる黒い新聞」の協力者などではないということ、また(二)断片に対するマーショー氏の二つの著書の批評を書いたものもゲツェではないとの文が載った。『フライヴィッリゲ・バイトレーゲ』並びにマーショーについては本論集四号四九頁「その一」の注一、同じく五三頁注五参照。

その四

注一 ローハス——スペインの劇作家(一六〇七—四八)、カルデロンと並び称された大家で、悲劇、喜劇、性格劇、神秘劇と往くところとして佳ならざるなく、三十余の作品あり。その道に尽した功によりサンチャアゴ教団の騎士に叙せらる。後のフランス劇にも大きな影響を与う。

注二 ラテン語が書けなかったベーコン——フランシス・ベーコンがラテン語ができなかったわけではないのだが、初期の『学問論』(一六〇四年、ラテン語版は一六二二年)及び『隨筆集』(一五九五年)は英語で書いた。

注三 論集類——ドイツの大学でもはやくより論集、紀要の類が記念日等の寄贈用乃至は年報附録といった形で発行されたが、論文は学術用語であるラテン語で書かれた。

注四 ウッハルテ——ウッハルテ・デ・サン・ファン (Huarte de San Juan, 1530/35—1592/3) サン・ファン (ナヴァラ) 生れのスペインの医者で哲学者、その著『Examen de ingenios para las ciencias』1575(『学術用頭部検査』)は宗教裁判所によって禁書となる。レッシングの独訳あり(一七五二年)。——同書でウッハルテは「そこで語学者というものは記憶力が強い連中とて、これと初歩の想像力とを結びつけ、必然的にあまり頭がよくなく、(ローハスの) 諺の描いているようなことにならざるを得ないようなことに相成るのである」と述べている。

注五 *Nonne……diverterunt?*——テルトゥリアーヌス前掲書第三章よりの引用。

注六 この点……七九、八〇頁で云々——『さしあたってのこと』で、ゲッツェは聖書及びキリスト教に対する尊崇の念と同時に、「臣民」の心にお上に対する恭順の精神とともに叛逆者に対する嫌悪の情が失われはしまいかと危惧の念を披歴しつつ、当局者にむかって反レッシング宣伝を行っている。そしてレッシングがここに引用した箇所もすぐ前にもこう述べている。「わたくしはこうした無理無法を終らせる時の近からんことを、さらにお歴々の方々が御自身の安全のため、或は少くとも生命を愛する者としてこれら不逞の徒が斬首、車裂きの御厄介にならぬようこうした痴れ者どもやかれらの無法の大それた爆発に制約を加えられんことをと神に祈るものです。」

注七 反対質問者——昔の大学では学位授与に当り、審査は学位申請者とその提出論文に対する反対質問者との間の論争の形で行われた。

——以下 次 号——